季報

二松学舎大学附属図書館
Quarterly Report

P2～3　思い出の１冊
新潮文庫の『個人的な体験』　五井　信　／
ナルチスとゴルトムント　―『知と愛』をめぐって―　牧角悦子
思い出の本　戸辺玲子　／　勇気をもらった一冊　安田一夫

P4～5　谷根千文学散歩

P6　図書館からのおススメ本

P7　本学所蔵資料紹介　／　作家のおやつ巡り②

P8　本学教職員著書紹介

No.111

2021（令和３）年 11 月

思い出の１冊

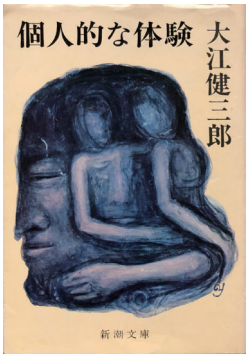
新潮文庫の『個人的な体験』

文学部国文学科　教授　五井　信

一九八一年四月に二松学舎大学文学部国文学科に入学した。だが、浪人三年目で唯一合格した学部学科に入学したという不純な経緯があったりでは、授業に身が入るはずがない。そんな私がこの大学、この学部学科で現在教員をしているのだから、人生何があるかわからない。「授業に身が入るはずがない」状態は卒業まで続いた。当時はまだ世間がタバコに寛容で、先生によっては授業中も喫煙可だったのが幸いしたに違いない（念のため記しておけば、十年前に禁煙した）。

文学研究に興味を持ったのは卒論執筆の途中だった。「あっ、面白いかも」と思ったのを覚えている。提出先は中村宏先生である。その卒論で対象としたのが大江健三郎の『個人的な体験』だった。手元にある新潮文庫版の『個人的な体験』の奥付を見ると一九八一年一〇月発行の四刷とあるので、おそらくはこの文庫を片手に卒論を書いたのだろう。いま気がついた。そうかあ、この文庫本、うっかり紛失するわけにはいかないなあ。

それ以降、この文庫本で『個人的な体験』を何度も読み返してきた。そのうちの一度は「自分が父親になるかも」なんていう思いがきっかけだったりするのだが、「何度も」の大きな理由がゼミで毎年取り上げているからだ。自分にとって忘れられない一冊をゼミの学生たちがどんなふうに読むのだろうか――、そんな些細な興味が発端となった。私のゼミⅠは毎週一つずつのペースで小説を読み進めるハードなものだが、顔ぶれの変わる全二八本のうち二つのテクストは第一期ゼミから変わっておらず、その一つがこの『個人的な体験』なのだった（もう一冊は秘密にしておこう）。



そんなこともあってこの一冊は、我が身におこった出来事や中村先生、ゼミでの発表や議論に参加した学生……、といったさまざまなことや人との思い出と結びついたりもしている。今年もまた、この文庫本を手にゼミの教室へ向かうのだろう。

おっと！　なくさぬよう、別の本で持っていくことにしようか（笑）。

ナルチスとゴルトムント
―『知と愛』をめぐって―

文学部中国文学科　教授　牧角　悦子

30 代の頃まで、毎年秋になるとヘルマンヘッセの『知と愛』を読むのが習慣だった。なぜ秋だったのだろう。この作品が栗の木の描写とともに始まるからか、あるいはこの本を契機とした大切な出会いが秋だったからか。新潮文庫の一冊目は、その頃すでにボロボロであり、手元にある二冊目も、もはや古文書状態である。

30 代・40 代の頃、通勤の読書は必ず文庫本小説だった。研究や教育と直接繋がらない創造世界に浸ることは、降りる駅を忘れる程の快楽だった。それが 50 代以降、大学人としての職務の増加につれて、通勤読書は行政文書か査読論文、校正原稿に代わった。それが悪いことだとは思わない。合理的業務処理なのだから。また、古典学という長期の習熟を要請される分野については、それなりの成果を出せる年回りになった。ただ反対に、今回この小文の要請を受けたとき、自分が永くヘッセを読んでいないことに、気がついてしまった。そして秋になった。

『知と愛』はナルチスとゴルトムントという２人の対照的人物によって、合理と非合理、学問と芸術、理性と激情、そして何よりも「知」と「愛」とを鮮明に描き分ける物語だ。ストーリーも表現も、小説というよりは、むしろ詩のように美しい。欲望を抱え込みつつも清澄に広がる小説世界は、初秋の空気感と似ている。

「愛」は、東洋の古典には無い概念である。冷徹な知性を代表するナルチスが、ゴルトムントに火のような憧憬を抱いた小説の終盤を、いま思い返す。秩序と精神性の高さを価値の中心に置く東洋的儒教倫理の内実を、自身の学問と思考の指針として確立しようとしてきたこの十数年の研究者としての歩みに、ゴルトムントの愛のささやきは新たな揺らぎをもたらすだろうか。報告書・企画書・データ、文字通り山積みの机上の対極にある、ブロンドの美女の吐息の意味を、それでも忘れてしまうことができないのは何故だろうか。

危険を承知でもう一度、『知と愛』を紐解いてみようかと思っている。この秋に。

思い出の本

国際政治経済学部国際政治経済学科　専任講師　戸辺　玲子

J・R・R・トールキンの『ホビットの冒険（The Hobbit, or There and Back Again）』、そして『指輪物語（The Lord of the Rings）』は、非常に有名な小説であり、2000 年代に入ってから映画化もされたため、多くの方がご存じかと思う。

私は、確か中学 1 年生か 2 年生だったと思うが、知人に勧められて『ホビットの冒険』を手に取り、そのまま『指輪物語』の結末まで、夢中で一気に読んだ。読んだのは春休みだったのか、夏休みだったのか、学校の長期休み中で部活のために登校していた時期だったが、通学の電車の中、部活の休憩時間、帰宅後は夜更けまで、とにかく部活以外の時間をほとんど使い一気に読んだ記憶がある。本に綴じられている「中つ国」の地図を見て、主人公たちの冒険の現在地を確認しつつ、彼らの冒険にワクワク、ハラハラしながら読んだ。後に、両書が、第二次世界大戦前・後に出版されて以降、世界中で読まれ、絶大な人気を誇っていると聞き、妙に納得した。

高校生になり、原語である英語でも読んだ。英語で長編小説を読んだといっても、翻訳本を読んだことがあるので、理解するのが容易であったのは当然のことだが、学校の課題としてではなく、自ら英語で書かれた小説を手に取り読み切ったのは、初めてのことだった。原書では、詩が非常に新鮮に映ったのを覚えている。『指輪物語』を読んだことがある方はわかるかと思うが、本書には物語の随所に詩が散りばめられている。詩にはリズムがあることが理由だろうか、原語で読む詩は、訳書とはまた異なる新鮮な印象を受けた。また、原書を読み、翻訳者ってすごいな、とも感じた。私は、瀬田貞二氏が翻訳した版を読んだが、物語を特徴づける独特な言い回しが、見事に日本語に訳されていた。ただ正確に訳すのでなく、物語の世界を表現するために適切な単語を使用しているように感じた。読者が物語に違和感なく引き込まれていくには、翻訳者の力も大きいのだろう。

大した読書歴もない私だが、中高生時代に夢中になったことを懐かしく思い出した。年を重ねた今、読み返したらどのようなことを感じるだろうか。そのうち、また手に取ってみようと思う。

勇気をもらった一冊

教職課程　特別任用教授　安田　一夫

私が教員になることを目標としたのは高校 2 年の時だった。そして、この目標を達成させてくれたのは、偶然に出会った一冊の本からもらった勇気のおかげだと思っている。

高校に入学すると、友人たちは早くも真剣に将来の進路の話や志望大学の話などをしていた。のんびり構えていた私は、成績も低迷し、この先何をしたらいいのかもわからず、話にはまるでついていけなかった。「目標もないのに苦労して大学に進学しても意味がない」などと思っていたのである。そんな時に出会ったのが、小澤征爾氏のエッセイ「僕の音楽武者修行」（1962 年発刊）である。

1959 年、二十代前半の若き音楽家は「外国の音楽をやるためには、その音楽の生まれた土地、そこに住んでいる人間をじかに知りたい」との強い思いから、クラシック音楽の本場であるヨーロッパに渡る。当時は敗戦後の貧しい時代で、彼は飛行機に乗るお金はない。「日本製のスクーターを宣伝しながらいくから」とバイクメーカーに掛け合って只で借りたスクーターに日の丸をつけ、単身貨物船に乗り込む。そして、フランスはマルセイユに上陸する。こうして始まった武者修行の中、9 月には、ブザンソン国際指揮者コンクールで日本人初の優勝を勝ち取る。国費留学で訪れている他の出場者たちとは違って通訳もつけられない彼が、音楽用語だけで課題に立ち向かう姿が目に浮かぶ。この快挙から、巨匠カラヤンやバーンスタインに認められ、ニューヨーク・フィルハーモニック（世界屈指のオーケストラ）の副指揮者に就任するまでが語られている。

私は音楽が大好きだが、特にクラッシック音楽に詳しいというわけではない。しかし、この本を読み、若き日の小澤氏の行動力、貪欲さ、目標に向かって突き進む生き方に感動し勇気づけられた。そして、ぼんやりしていた教員を目指すことを具体的な目標とし、大学進学を決めたのである。とても感謝している。

一冊の本との出会いが人生を左右することもあるのではないだろうか。

谷根千文学散歩

①

谷根千【やねせん】とは、文京区と台東区一帯の谷中・根津・千駄木エリアの総称です。1984 年に創刊された地域雑誌『谷中・根津・千駄木』を、地元の人びとが略して「やねせん」と呼んだことから、この辺りを示す言葉として定着していきました。今も尚下町情緒を残すエリア、夏目漱石（※ 1）や森鷗外などが暮らした谷根千の文学史跡を紹介します。

②

③

JR 日暮里駅西口①を出ると、谷中霊園②が広がっています。霊園には作家の円地文子や歌人の佐佐木信綱をはじめ、依田學海や芳野金陵といった漢学者など、多くの著名人が眠っています。また、大河ドラマや刷新される一万円札の肖像として今話題の渋沢栄一（※ 2）の墓③もここにあります。

霊園のほぼ中央には、五重塔跡④として塔の中心礎石が遺っています。塔は寛永 21 年に建立されましたが、昭和 32 年に心中放火事件によって消失してしまいました。明治 24 年から同 26 年まで、霊園に隣接する谷中天王寺町（現・谷中 7 丁目 18-25）に居住していた幸田露伴⑤は、日々この五重塔を眺めながら構想を練って執筆した小説『五重塔』で文壇の地位を確立しました。『五重塔』は、寛政 4 年の塔再建にまつわる話で、主人公である“のっそり十兵衛”の塔建立への葛藤と執念が描かれた作品です。

④

⑤

霊園を抜けて千駄木方面に向かいます。千駄木駅を過ぎると、団子坂⑥が見えてきます。名前の由来は、坂近くに団子屋があったからとも、急な坂なので転ぶと団子のようになるからとも言われています。

⑥

名探偵明智小五郎が初めて登場した江戸川乱歩の『D 坂の殺人事件』は、この団子坂を舞台にして、乱歩が兄弟と一緒に「団子坂で自営した古本屋の店構えや近所の様子を念頭に置いて書いた」（「探偵小説四十年」『江戸川乱歩全集　20』講談社刊）ものです。幕末から明治末にかけては、菊人形でも有名で、夏目漱石の『三四郎』では、広田先生の一行が団子坂の菊人形見物に出掛けた様子が次のように描かれています。

「ある日の午後三四郎は例の如くぶら付いて、団子坂の上から、左へ折れて千駄木林町の広い通りへ出た。」（『漱石全集　第 5 巻』岩波書店刊）

⑦

坂の中腹には、森鷗外が明治 25 年から 60 歳で没するまでの 30 余年住んだ「観潮楼」跡があり、現在は文京区立森鷗外記念館⑦となっています。東京湾が見渡せることから名付けられた「観潮楼」で、鷗外は与謝野鉄幹や石川啄木、伊藤左千夫ら各派の歌人と歌会を開いたり、研究や創作活動に勤しみました。

⑧

坂を挟んだ記念館の向かいには、「青鞜社」発祥の地の看板⑧が立っています。「青鞜社」は、平塚雷鳥（※ 3）が中心となって明治 44 年 6 月 1 日に結成され、日本ではじめての女性だけの手による文芸雑誌である『青鞜』を刊行しました。その創刊号の発刊の辞に載っている雷鳥の「元始、女性は実に太陽であった」は有名ですね。当初、青鞜社は詩歌が中心の女流文学集団でしたが、次第に婦人解放運動に発展していきました。

団子坂上の交差点から田端方面へ向かう途中に、彫刻家で詩人の高村光太郎が住んでいた場所⑨があります。現在は案内板があるだけですが、詩集『智恵子抄』で有名な妻・智恵子と 20 数年この地で暮らしました。先程紹介した雷鳥の『青鞜』創刊号の表紙に凛とした女性を描いたのが、光太郎と結婚する前に画家として活動していた智恵子です。

駒込学園前の交差点を左に折れると、夏目漱石が英国留学から帰国した明治 36 年 3 月から同 39 年 12 月まで住んでいた旧居跡⑩があります。この地で処女作『吾輩は猫である』が誕生したことから、通称「猫の家」と呼ばれていて、猫の石像⑪もあります。石碑の「夏目漱石旧居跡」の文字は、川端康成の筆によります。ちなみにこの家は、漱石が住む 13 年前の明治 23 年 10 月から同 25 年 1 月まで森鷗外が住み、文学活動に励んだ場所でもあります。鷗外はここから団子坂上の観潮楼へ移っていきました。旧居は現在、愛知県にある明治村に保存されています。

根津神社⑫の裏にある新坂⑬は、森鷗外の小説『青年』で「純一は権現前の坂をくだって歩き出した。・・・割合に幅の広い此坂はＳの字をぞんざいに書いたように屈曲している」と描写されたことがきっかけで、S 坂とも呼ばれるようになったそうです。

締めくくりは、薄くてパリッとした皮としっぽの先まであんこの詰まった「根津のたいやき」⑭を食べて、散歩の疲れを癒しましょう。

二松学舎と関係のある人物

※1　夏目漱石：明治時代を代表する文豪。明治 14 年から在籍し、漢学を三島中洲のもとで学んだ。
※2　渋沢栄一：近代日本を代表する実業家。創立者・三島中洲と親交があり、第 3 代二松学舎舎長を務めた。
※3　平塚雷鳥：女性解放運動家。明治 39 年に二松学舎で学ぶ。

①日暮里駅西口
②谷中霊園
③渋沢栄一の墓
④五重塔跡
⑤幸田露伴旧宅跡
⑥団子坂
⑦森鷗外記念館
⑧「青鞜社」発祥の地
⑨高村光太郎旧居跡
⑩夏目漱石旧居跡
⑪猫の石像
⑫根津神社
⑬新坂
⑭根津のたいやき

図書館からのおススメ本

今回は、最近購入した図書の中から、「検索」「レファレンス」といった「調べる」ための本をご紹介します。

入矢玲子著
『プロ司書の検索術
―「本当に欲しかった情報」の見つけ方』
（図書館サポートフォーラムシリーズ）
（日外アソシエーツ、2020 年 10 月刊）

こちらの図書は、私立大学図書館に勤務する著者が「情報の初心者が使えるガイドブックを目ざし」て書いたものです。学術情報はサーチエンジンでは探せない点を指摘し、図書の探し方、雑誌や新聞記事・論文の検索方法、統計の探し方、人物情報へのアクセス、法情報の検索などを紹介しています。

上記の内容に加えて信頼できるサイトの探し方、検索の質を向上させるためのキーワードの発想法などにも触れられています。検索スキルにとって大切な演算子（AND、OR、NOT）や検索の手順についても詳しく述べられています。

最終章では、「情報館」に変身した図書館が抱える問題点や将来像について述べられています。また、本書の最後の方には「情報検索・図書館をもっと知りたい人のために」と題し、関連図書が紹介されています。

ぜひ一度手に取って検索スキルの向上にお役立てください。

漢字文献情報処理研究会編
『デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル』
（好文出版、2021 年 3 月刊）

「中国学を学ぶ学生・大学院生や研究者だけでなく、隣接分野を専攻する人が中国関連の調査を行うときにも役立つガイドブック」として企画された図書です。また、「本書はこういった研究入門書や工具書指南サイトの不足を補い、伝統的な中国学とデジタル化時代の中国学の架け橋となるべく企画されたもの」とも言っています。

内容は、「基礎知識」から始まり、漢字漢語、文献、仏典・道教経典、論文、人、制度、社会、文学、音韻などの分野にわたって、その調べ方が述べられています。従来の紙媒体の工具書（参考図書）ばかりでなく、各分野に関連するデータベースも数多く紹介されています。

中国関連の事案でどう調べたら良いか分からない時には、この本を見てみてはいかがでしょうか。また、すでに知っている事柄も、この本を読むことで何か新しい発見があるかも知れません。

大串夏身著
『レファレンスと図書館　ある図書館司書の日記』
（皓星社、2019 年 11 月刊）

『ある図書館相談係の日記　都立中央図書館相談係の記録』（日外アソシエーツ、1994 年刊）（請求記号 015.2-A）を増補したものです。したがって、ここに掲載されている日記は 1988 年と 89 年のもので、新しいものではありませんが現在でも大変役立ちます。

「解説対談　レファレンスの理論と実践、そしてこれから」の『「ある図書館相談係の日記」成立全史』で、対談の聞き手である、国立国会図書館の小林昌樹氏はこの本を復刊したいと思った理由を二つ挙げています。一つは類書がなく、参考図書をどう使うか、どのタイミングで使うかを、「利用者との対話に載せた形」で書かれていること。もう一つは「調べものをする一般人にも役立ったり、面白く思われたりする記述があること」と述べています。

上記の解説対談には、これからのレファレンスについても記述があります。レファレンスの古今、未来を覗いてみるのも面白いと思います。

槇盛可那子，樋渡えみ子編著
『れふぁれんす百題噺』
(JLA 図書館実践シリーズ :42)
（日本図書館協会、2020 年 6 月刊）

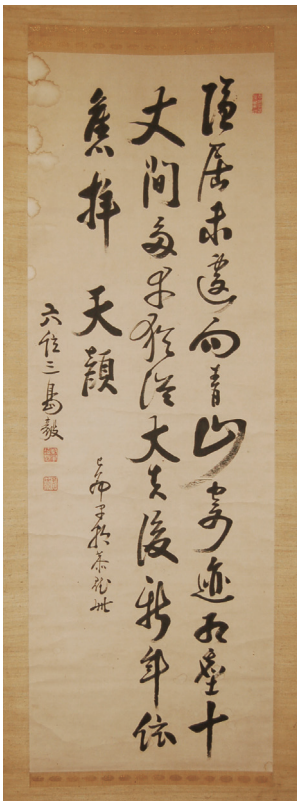
『図書館雑誌』に連載中の「れふぁれんす三題噺」に掲載されたレファレンス事例から、100 題を取り上げ、5 つの観点（「インタビューで真意をつかむ」「調査戦略を練る」「インターネットを活用する」「助けを求める」「自館を知る」）から整理された本です。図書館で初めてレファレンスを担当することになった方などを主対象にしていますが、そうでない方でも面白いなと思える事例が多々あります。どんな事例があるか、手に取って読んでみてはいかがでしょうか。

本書にも紹介されていますが、ネット上には様々な図書館のレファレンス事例を集めている、「レファレンス共同データベース」（URL:https://crd.ndl.go.jp/reference/）という便利なものがあることを最後に付記しておきます。

本学所蔵資料紹介

三島中洲書幅　明治十二（一八七九）年

三島中洲（一八三〇～一九一九）…本学創立者。明治十（一八七七）年六月大審院判事を退職、同年十月漢学塾二松学舎を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九一二）年新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。



隱居未遽向青山　隱居して未だ遽かには青山に向かはず
寄迹紅塵十丈間　迹を寄す　紅塵十丈の間
多幸猶從大夫後　多幸なり　猶ほ大夫の後に従ひ
新年依舊拜天顔　新年　旧に依りて　天顔を拝す

官を辞して、世事から引きはしたものの、まだすぐには山の中に引きこもったりはしない。

にぎやかな大都会の中に身を置いている。甚だ幸いなことに、かつて大審院の判事の末席にいたおかげで新年には、以前と同様、朝拝に参列して、天子様の御顔を拝することができる。

（石川忠久編『三島中洲詩全釈』第一巻より）

作家のおやつ巡り②

「僕等は…久しぶりに「天神様」へお詣りに行つた。…「天神様」の外へ出た後、「船橋屋」の葛餅を食ふ相談をし…葛餅を一盆ずつ食ふことにした。」

（「本所両国」『芥川龍之介全集　第 15 巻』所収　岩波書店刊）

亀戸天神

これは、芥川龍之介著「本所両国・天神様」の一節です。本所区小泉町（現・墨田区両国）の母方の実家で暮らしていた芥川は、府立第三中学校（現・都立両国高等学校・附属中学校）に在学していた。授業を抜け出してまで食べに行ったという逸話が残っている船橋屋名物のくず餅。今号では、そんなくず餅を買い求めに、亀戸の町を訪れました。乳白色の餅は、“もっちり”とした歯ごたえで、きな粉の香ばしさと黒蜜の濃厚な甘さが渾然一体となったおいしさが口の中に広がります。

芥川のみならず、永井荷風や吉川英治も愛したという船橋屋のくず餅。読書の休憩に食してみてはいかがでしょうか。

本学教職員著書紹介

『三輪田米山 魂の書』改訂版

高澤 浩一 著
（芸術新聞社、2021 年 4 月 20 日発行）
A4 判　319 頁・3,636 円＋税
ISBN：9784875866169

本著は、明治時代に四国は愛媛松山の地で神官の職にあって書家として名をのこした三輪田米山の足跡を辿った書物です。

第一章「書人・米山の歴史」では、書学への道のり、神官としての米山の歩み、米山の真筆解説、米山の文房用具、落款などについて時代考証しています。その拠り所とするのは、米山が書きのこした『米山日記』と呼ばれる二百余冊の日記資料です。松山の地にあって米山は歴史上の偉人であり、語り継がれた逸話が、いつの間にか尊大な話になっていることが多く、また、松山に遺る書跡や石文に、米山は落款を入れないことも多かったことから、一見すると他者の作と見紛うものも少なくありません。よって、それらが偽らざる米山の話なのか、または米山の真跡書であるのか、これらを判断する方法が、もはや『米山日記』からの史実の照会に依るしかなかったのです。

第二章「神社・寺院の石文と書跡」では、松山市とその郊外の神社、寺院の主に注連石や鳥居などに刻まれた大字の文字について実地調査に基いた報告です。神社と寺院の数は七十九箇所、石文の総数は百二十余石を数えます。ここでも『米山日記』において米山が依頼を受けて揮毫に及ぶまでの経緯などを日記原文を載せて解読を試みています。

本書の序文の一部を紹介してみましょう。

――― 米山の書は、人の技法に流されることも、人の書に惑わされることもなく、ぐんぐんと、淡淡と、堂堂と、自分を押し通して、いわば伊予人の、ねばりと向き合う気の強さによる土性骨の勁さが独往邁進させたのである。米山の書く大字書には迫力が漲っている。それは形式などに捉われず、技巧を超越し、書が心の内から躍動して書かれた為である。私はそれを「魂の書」と言った。―――

文学部中国文学科　教授　髙澤　浩一

編集後記

「季報」111 号をお届けします。

読書の秋です。今号では、「思い出の 1 冊」を 4 名の先生にご執筆いただきました。学生時代の読書は一生の宝となりますので、皆さんも多くの本を読んでください。

食欲の秋です。「谷根千文学散歩」や「作家のおやつ巡り」で紹介された品を、味わってみるのも一興かと思います。（S・A）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第 111 号

発行日　2021 年 11 月 1 日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒 102-8336　東京都千代田区三番町 6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館　〒 277-8585　千葉県柏市大井 2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ